

「資料紹介」

図書資料部の近着資料のなかから数点を選んで紹介します。その他の近着資料については『アジア経済資料月報』をご覧ください。

川田順造著 サバンナの王国 東京 リポート
1992年 249p.



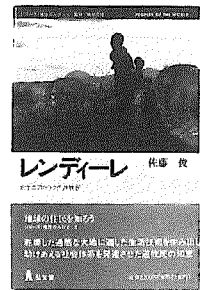
ブルキナファソのテンコドゴ王国のティグレ王は即位33年の儀礼を執り行なうことになった。しかし王自身も側近たちも伝承でしか知らないこの儀礼をいったいどうやって行なうのだろうか。本書は、口頭伝承を手掛かりにサバンナの諸王国の歴史の再構成に取り組んできた川田氏が、「伝承が作られる」現場としての興味からこの儀礼を観察した記録である。ティグレ王の王宮、儀礼の場であるガーナの小村ガンバガ、そこを統べるマンブシの王宮という舞台回しの妙、儀礼を取り巻く人々のさまざまな姿と思い、晴れがましい王の姿とその裏に氏が認めるいくつもの負の側面、そして川田氏自身の歴史——この王国との30年余りの付き合い——。これらがひとつになって本書は、単なる記録にとどまらない、臨場感あふれる物語となっている。

写真の効用も大きい。氏が友人たちに君の写真だといって手渡す。うれしい反応が返ってくる。読者はその同じ写真を見て愉しむことができる。視点を共有するとでも言おうか、奇妙な一体感が醸し出されている。

ところどころ書きとめられた氏の思いには深い問題提起がこめられていたりもする。伝承にゆかりの史跡の前で、テレビカメラに向かって得意げに「誤った」歴史を語ってみせる王に対して、氏が「人類学者として」複雑な思いを抱くところ。訪ねる度違う話をする老人に対して、「自分の“学問”がこういう人たちの言うことの上に成り立っている」ことへ嫌悪を覚えたことがあるとの告白。ものごとを見ることにつきまとう困

難にさりげなく触れる、経験に裏打ちされた言葉に、饒舌な語り口とあいまった円熟を感じる。(佐藤 章)

佐藤 俊著 レンディーレ
—北ケニアのラクダ遊牧民
東京 弘文堂 1992年
189p.(シリーズ 地球の人
びと 3)

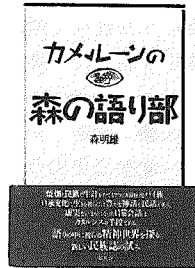


レンディーレは、ケニア北部の半砂漠地帯に住み、ラクダの飼育を中心に遊牧生活を営む、人口にして2～3万の人たちだ。ケニア全体からみたらわずかな人数だが、その割には広い地域にまたがって暮らしている。日中は灼熱地獄、夜は冷え込み、雨が少なく農業に不適という気候条件の悪さが、それを必要とした可能にもしている。生活環境がきびしければきびしいほど、種族が生き残るためにどうしても必要なのだろう。ここに記録されたレンディーレ人は厳格な慣習とおきてに従って暮らしている。グループのメンバーの成長段階別、男女別、家系別による役割や序列、性、結婚などに関する多くの約束事がある。また経済的には、全面的にラクダに依存し、食、衣、住をまかない、交通・運搬手段、貨幣代りでもあるラクダにまつわるさまざまなきまりがある。それが実に詳細に書かれていて、たとえば授乳期のラクダの朝昼晩の搾乳時に、四つの乳首のうちいくつを子供に吸わせ、いくつを搾乳するのかなど、興味深い話が満載だ。この厳しい気候風土の中で、これだけ綿密な調査研究を積み上げてきた著者の情熱は貴重で、確実に歴史の1ページを飾るエスノグラフィーだろう。

これらの細かいきまりは全レンディーレに共通なものと考えていいのだろうか。情報はどのように伝わる

のだろうか、彼らの社会の中へ、外部世界の波はどのように押し寄せているのか、次々と興味が湧いてくる。シリーズの監修者綾部氏の紹介によれば、ラクダを中心としたレンディーレ社会の研究では世界有数のオーソリティーである著者は、動物学から霊長類研究を経て、アフリカ遊牧民社会の生態学的研究へ入った人類学者で、1975年からたびたび現地を訪れ、現在もレンディーレ研究を続けている。(丹基靖子)

森 明雄著 カメルーンの
森の語り部 東京 平凡社
1992年 379p.



著者は霊長類の社会学、生態学を専門とする研究者であるが、本書は一般向けの読みものであり研究書ではない。カメルーンで本業の調査を行っていたときに会った現地の人々の話があまりに面白く、興味深い異文化体験でもあったので書きとめておいたものをまとめたのが本書である。話し手は著者の助手をつとめたエソノ君。彼は調査に向かう車中での数時間、また就寝前の数時間に自分の知っている話をしてくれる。それらはエソノ君が他の誰かから聞いたり、創作したり、あるいは体験を交えたりしたものだ。しかも、どれほど長時間話し続けても同じ話はしない。それはエソノ君が特に話上手だからというわけではない。アフリカのこの地域の人々がオーラル・カルチャー（口承文化）の中で育っているため、誰もが話上手なのである。そしてそういう会話の中からさらに新しい話生まれる。面白くて人生の教訓など含蓄に富み、むずかしい人間関係を上手くやっていくための豊かな知恵を授けてくれる。

著者は「祖先と神」「支払う」「ヤシ酒と夫婦喧嘩」など25章に分けて、それぞれの話を著者の多少の考察をつけ加えて紹介している。読者は自分の目にとまったところから自由に読んでいけばよい。登場人物の関係を頭に入れるのは慣れないとかなりの集中力を要するが、逆にそこが面白いところでもある。第1章は「人は怒り狂って死ぬものだ」であるが、そう言われても日本人にはどうもピンとこない。人は怒って自殺する。怒りがなければ悲しみもないという。だが日本では自

殺の理由に「怒り」を持ち出すことはないのではないか。こう考えていくと登場人物の内面が手に取るようにわかってくるような気がする。本書はカメルーンの人々の精神世界をみごとに描いた書である。

(鈴木陽子)

梶 茂樹著 (ことばを訪ねて) アフリカをフィールドワークする 東京 大修館
1993年 224p.



1980年代初めの某月某日、日本学術振興会ナイロビ事務所

所で、ヘッドライトとワイパーが壊れた車で雨夜のでこぼこ道を運転する大変さをさも楽しそうに話すフィールドワーカーと出会ったのだが、それが本書の著者梶さんだった。また、ドラムでのコミュニケーションに興味を持ち、実際に叩いてもらったら、村人が集まってきて、用もないのに呼ぶなどえらく怒られたと、東京の喫茶店で悪びれたふうもなく話してくれたのも、梶さんだった。

本書では、そんな梶さんの苦労談が、次に何が起こるのかと読者をわくわくさせる語り口でつづられている。もちろん、随所にちりばめられた言語学者としての洞察が、辛口のスパイスとして利いていることは、いうまでもない。

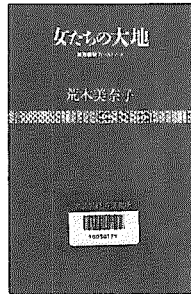
本書の本文部分の章立ては、I. フィールド調査、II. 村の生活、III. アフリカの言語問題、IV. 諺と名前は何を語るか、V. 国境を越える音楽と映画、である。この構成から容易に想像されるように、本書の主題は言語という領域を大きく越えて広がっている。言語を、他者と意思疎通する一手段と考えれば、ドラムだって、レガ族の知恵の紐だって、同様に立派な伝達手段である。そして、人の名前も他者と識別するための単なる記号ではなく、重要なメッセージが込められている。ことばを訪ねてアフリカに意気軒昂として分け入っていった言語学者が、「あれから16年」たったたどりついた地点は、ことばを通じて広がるアフリカの社会そのものであった。

本書を読むと、1人当りの食糧生産が落ち込み、対外債務の重圧に押しつぶされそうなアフリカという経済学者の描き出すイメージが一掃され、こんなに明る

いアフリカがあるんだと、なにか楽しくなってくる。それも、経済がだめなら音楽や絵画があるさといった、論点のすり替えではなく、アフリカの日常の生活から、明るいアフリカを伝えてくれる。こんなに活力のある人々が暮らしているのなら、アフリカの未来は何とかなるんじゃないかと、希望をもたせてくれる本である。

(池野 旬)

荒木美奈子著 女たちの大地：開発援助フィールドノート 東京 築地書館
1992年 219p.



楽しい本だ。著者が青年海外協力隊員として3年間暮らしていた、ザンビアの農村の様子がいきいきと描かれている。「村落開発普及員」という、わかったようなわからないような職種で派遣された著者。彼女は、日本から「モノ」の援助ばかりを期待する地方の開発事務所の所長や、8人の子どもを持ちながら精力的に仕事を進める同僚など、さまざまなタイプのザンビア人に囲まれながら女性組合活動を推進していく。

草の根の国際協力、といえば聞こえはいいが、協力隊の活動は決して美談だけに飾られたものではない。たとえば、女性組合のニーズを知るために村回りをしていたときに、「あんたみたいな、白い人間の前で、べらべらと喋れないよ」と、組合員の一人にいわれる。結局自分はよそものでしかない、と感じるときの疎外感。あるいは、村での活動を一緒にしてきた組合のリーダーたちが、給与のいい外国のNGOに引き抜かれそうになる。今いなくなったら村はどうなるの、との著者の問いに、「(あなたは)通り過ぎていく人間だからそんなことを言えるのよ。私たちだっていい暮らしをしたいわ。機会があったら、上にのし上がっていきいたいと思うの当然でしょ。もっともな言い分である。が、ふと「三年ちかい月日はなんだったんだろう、という思いがよぎった」りする。こんな思いを、著者は美談の陰に隠したりしない。

本書の冒頭部分のやや堅い書き出しを見たとき、これは堅苦しい援助論の類かな、と一瞬身構えたが、読み進んでいくうちにそれが杞憂にすぎなかったことが

わかった。本文中の写真に登場する、著者の知人やこどもたちの表情も、とてもいい。(高根 務)

青木澄夫著 アフリカに渡った日本人 東京 時事通信社 1993年 274p.



世界の津々浦々まで日本人が進出するようになった現在、アフリカとてその例外ではない。しかしながら今を去ること100年、明治期のこととなると話は別である。外交文書を中心とした地道な作業が続けられているものの、まだまだ知られざる歴史は少なくない。

本書はこうした明治時代に「アフリカにいた」あるいは「アフリカにいった」日本人に焦点を当て、その人物史を通じて現地の諸事情や日本との関係といった問題について考察してゆく作業と言える。

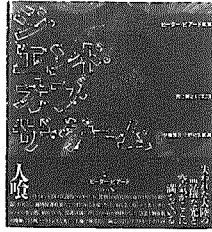
ボリュームにして全体の半分近くを占める第1章では冒険小説家、押川春浪の手になる探検旅行記を手掛りとして、「アフリカにいった」稀代の無銭旅行者、中村直吉の足跡をたどる。著者は「にわかには信用しがたい話」も含めて丁寧に跡づけながら、適度にプレーキをきかせつつ筆をすすめていく。中村自身が携行した署名簿や現地紙の記事といった原資料の発掘もさることながら、戯作扱いされかねない文献資料を粘り強く解釈した点は注目に値する。

続く第2章では、当時「アフリカにいた」貿易商、古屋駒吉を軸にして、植民地宗主国が牛耳る現地社会に生きる日本人商人たちの群像が描かれている。外交的保護が不十分な中で商活動の一端が、彼らの努力の様子を通じて浮き彫りにされてくる。そこには当時もてはやされた海外雄飛の別の一面も見取れる。

最後の第3章は、むしろ補説とみるべき章であり、二つの人物史のそこそこに登場してくる名もなき女性たち、「からゆきさん」についての覚え書きである。著者としては同胞からもうとまれ、おとしめられながら、しかも現地に生きた彼女たちのことに言及せずには筆をおけなかったであろう。

全体の構成に難ありと言えなくもないが、写真を含めて原資料からの引用も適切であり、著者の研究蓄積の豊富さを感じさせられる一冊である。(望月克哉)

P・ピアード著 西江雅之
監修 伊藤俊治・小野功生
訳 ジ・エンド・オブ・ザ
・ゲーム 東京 リプロポ
ート 1993年 296p.



アフリカのゾウやシマウマ、サイたちがハンターの楽しみや収入のために狩られていく写真、無造作に釣り下げられた皮の無い死体、航空写真の画面いっぱいにはろがる大量の骨。本書は一見、こうした動物たちの悲惨な姿をあえて連ねることで、狩猟反対と保護を訴えているかのように見える。しかし、それらの写真にはさみ込まれた文章を根気よく読んでいくと、著者P・ピアードのメッセージは、それと全く逆であるとわかってくる。本書『ジ・エンド・オブ・ザ・ゲーム』は、19世紀から今日にいたるアフリカの野生動物とハンターたちの貴重な記録をおさめた写真集ではあるが、同時に、「飢饉への保護政策」一般を糾弾するピアードの長大な意見書となっているのである。

野生動物の保護を目的とした国立公園の整備や密猟の厳格な取り締まりにより、たしかに現在のアフリカでは、動物たちがハンターに追われることは少なくなった。だが、ピアードによれば、アフリカにおける伝統的ハンターこそ「原野における生態的バランスを保つうえで、むしろ絶対不可欠なもの」(P・ピアード「出口なし」[Switch, 1993年3月号]46ページ)であった。狩猟のすべてを違法としてそのハンターたちを駆逐し水揚と餌場を確保するといった、善意の人々による「保護」こそが、棲息地内の動物たちを過密化させたのであり、そのためにすでに数万頭以上のゾウ、何千というサイが苦しんだ末に餓死している(本書278ページ)——ピアードはこう訴えかける。

さらに、巻末に新たに収録された「1988年版へのあとがき」まで読み進んだ読者は、彼の視野がアフリカの野生動物だけでなく、ヒトをも含むものであると知ることになる。本書のメッセージ——安易な「保護」による個体数の過密化が更なる飢饉の発生と大量死の原因となるという警告——は、実は飢饉に瀕するアフリカの人々に食糧援助を行なってきたすべての主体にも等しく向けられるべきものであるという驚くべき一

節の後で、彼はこう問いかけるのである。

「いつになったらわれわれは、単純にわれわれの数が多すぎるのだということを学ぶのだろうか」

百聞は一見に如かずというが、本書は例外である。ほとんど全体を占める写真は、文章の形をとって表されたピアードの主張が読まれることで、はじめて重い意味を孕み、存在を開始する。(津田みわ)

ネルソン・マンデラ著 浜
谷喜美子訳 闘いはわが
人生 東京 三一書房 1992
年 504p.



南アフリカ共和国のアフリカ民族会議(ANC)現議長のN・マンデラについては、これまでM・ベンソン著『ネルソン・マンデラ：その人と活動』(新日本出版社 1989年)およびF・ミーア著『ネルソン・マンデラ伝、こぶしは希望より高く』(明石書店 1990年)の二つの伝記が翻訳され、紹介されてきた。今回ここに翻訳されたのはマンデラの唯一の著作で、1978年の初版に、その後、増補が行なわれて90年に出版された第3版である。マンデラは1990年まで27年間獄中にあり、著作といっても、年代順に配列された投獄以前の演説、獄中での裁判の陳述が中心で(第2部)、本書の編者である「南部アフリカ国際支援基金」が第1部でマンデラの活動歴を、第3部では獄中の仲間がマンデラの横顔をそれぞれ紹介している。

若き日のマンデラはレンベデ、タンボラとANC青年同盟を結成し、その後50年代のANCの不服従運動や自由憲章を採択した人民会議にも積極的に関与し、国家反逆罪の汚名を着せられたが、それに対しても勇敢に戦い、1960年のシャープビル事件後のANCの非合法化とともに地下にもぐり武装グループ「民族の槍」を指導した。このため62年逮捕されたが、獄中でも屈せず反アパルトヘイト思想を貫いていることは、この第2部の記録を読めば明らかである。特にマンデラの思想は、リボニア裁判での被告席からの法廷陳述と61年地下にもぐった彼がそこから同志に送った「闘いはわが人生である。私は生涯を終える日まで自由のために闘い続けるであろう」というメッセージによくあらわれている。翻訳はよくこなれていて読みやすい。(林 晃史)